The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清少納言の精神機構 ： 「翁丸」の鑑賞を中心として
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 1951, 4, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68386
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

清少納言の精神機構

――「翁丸」の鑑賞を中心として――

林　和比古

一、喜劇か悲劇か

長保二年(一六六〇)三月の中、下旬。場所は小一条院の仮宮。一条天皇の御寵愛になる猫に、お飼犬翁丸が猫がゝりの乳母の冗談を真にうけて嚙みつかうとした。このため翁丸は天皇の御勘気をうけてどこかへ流された。三四日たってこの犬が宮中へまた帰って来たので捕へられ、そして遂に撲殺されたと婢女が報せた。

その夕方泥まみれになり腫上った犬が来たので、翁丸かと女房達は名をよんでみたがふり向きもしない。これは別の犬だと衆議が決った。その翌朝定子皇后の御側に侍っていると、昨夕の犬がみすぼらしく蹲っている。清少は「たうとう翁丸も殺されてしまったわ。可哀さうに。こんどは何に生れ変ったことだらう。死ぬ時はどんな気持だったらう」と独語すると、側に居た犬が、突然ふるひわなゝき涙を落す。清少はさてはと思って、「それではやっぱりお前は翁丸だったの?」といふと、犬は頭をたれてますます泣く。それから後宮は大騒ぎとなり、皇后はもちろん、天皇も女房達も集ってき、感心し笑ひさわいだ。中にはその犬を検分しようといふ蔵人の声もあったが、天皇のお許しが出て翁丸はまた飼はれることになった。

これが現行の枕草子第七段「うへにさぶらふ御猫は」の梗概である。この記事をどう解釈し鑑賞するかといふことが本稿の出発点であるが、それにはまづ

○作者清少がどんな態度でこれを録したか、単なる日記、雑録としてこれを草したか。

○われ〳〵は如何にこれを鑑賞すればよいか。

右の二点を検討する必要がある。世には鑑賞の主観性独自性を主張する人があるが、誤った解釈の上に立って、鑑賞の独自性を主張するのはいはれなき事である。人間の心情は不思議なもので、解釈が完全に一致すると感受鑑賞もまた一致することが多いのである。

さて「翁丸」に対する従来の学者の鑑賞は必ずしも一致しないのである。主な説は次の通り。

(1)平穏な平安朝の平板な出来事としたもの

枕草子選釈(佐々政一稿・山内二郎補)・犬が猫を追って終に勘勘を蒙ったなどは左程大した出来事では無い。而してその痴者たる

翁丸が君の御咎を恐れ憚って、我が名を隠し忍んだのを終に清少が見顕したといふ。これも左程の大事件とも思はれない。こんな些細な事が宮中の評判となり終に清少をして長文をものせしむるに至ったのを見ては、当時の宮廷生活がいかに平板なものであったかゞ思ひやられるでは無いか。……此の「翁丸」の一段は波瀾に乏しい事件でその出来事も左程珍奇な事では無い。（傍点筆者。以下同じ）

(2)喜劇としたもの

日本古典読本枕草子（塩田良平）・之はあくまでも、長閑な喜劇でなければならぬ。主上も宮も右近も、勿論清少納言自身も翁丸の殊勝さに思はず笑ひくづれ、すべてが陰惨なものを吹きとばして、笑ひに落ちて行くところに、この作の眼目があることを知らねばならぬ。……この真面目な愛すべき道化役者の翁丸をば是等の高貴な方々と共に微笑ましく見送って、この枕草子の一巻を閉ぢることにしょう。

枕草子の精神と釈義（田中重太郎）・平和な宮廷生活の一日の話題となり、又行事となったこの喜劇を、拙い釈義を終へる最後の段として説きたい。

(3)単に宮中生活の一挿話としたもの

評註枕草子選釈（岸上慎二）・宮中生活の一挿話としてわれわれに見逃すことの出来ぬ名文とすべきである。……とにかく平安朝の一条天皇の大御代の事柄としてゆかしく思はれる段で、又筆者の清少納言の涙もろい性格も十分出てゐる。

一挿話といふのでははっきりしないが、あまり重要でもない出来事といふ意味に解してよからう。

(4)珍らしい犬猫の話としたもの

枕草紙抄（加藤磐斎）・猫犬などの事に付てことゞくなるおもむきをいひ述たり。

旁註（岡西惟中）・是マデ犬猫などの上に聞みみことなるものなり。（これらは今昔物語や霊異記にあるやうな異談珍説として翁丸の段をとりあげてゐるのである。）

以上の著書はともかく語句の註釈ばかりでなく、鑑賞の仕方、主題のありかを示してゐるのであるが、いづれも本段の特色は迫力ある心的内容を示すにありとせず、たゞ事実の描写に名文たる特質があると云ふのである。

此の書は一面から見て一条院の期における宮廷の巧妙なる活動写真とも見れば見られる。……若し凡筆を以てこれを叙したならば殆んど見るに堪へないであらう。（枕草子選釈）

そのさんざめきを終りの数行でキチンと緊めてゐる彼安の才筆も又思ふべしである。（日本古典読本枕草子）

(5)次に私の考へ方を述べる。

(a)弱者翁丸が悲境に陥って、いぢけ、頑なになってゐる。いったんその境遇に他から間接にでも、同情の寄せられたのを知ると、感激し、頑なになった心もくづをれて嗚咽にむせぶ。悲喜こもごも至る翁丸の激情が表はれてゐる。

(b)翁丸自身はその行動及び心理を自分で説明しないから、第三者には分らない。第三者はそれぞれ自己の心情傾向によって各自の判断を下すわけである。清少は(a)の様に犬の心理行動を解釈し観照して文章にしたのである。清少ばかりでなく、その場に居た人々――定子皇后、女房達、そしておそらく一条天皇も清

少と同じ判断を下されたと考へられる。それらの人々は定子皇后の悲境に同情し、その気持を以て翁丸事件を観てゐるのである。

(c)犬の事件をかく理解しない人々も宮廷には居た筈である。蔵人忠隆もその一人であるが、かりに彰子中宮方の人達がこの事件を見たとしても、それほど身に泌みて感じなかったであらう。

(d)以上(a)(b)(c)のやうに事象を把握して清少はこの文章を草した。ゆゑにこの事件を喜劇ととるか悲劇ととるか、平板ととるか深刻ととるか、異談珍説ととるか主体的心情表現の作品ととるかで、作者清少の精神を理解する尺度となし得ると思ふ。

(註) ○池田亀鑑博士は枕草子評釈（雑誌、国文学解釈と鑑賞昭和二三年九・十一・十二月号）「あはれ」の語註において、「畜生の身ながら、人の心を察して人間らしい行動をとった犬に対して清少納言が自らの全感情を移入し、その心境をのべてゐるのである。即ち犬の行動の中に、人間らしいものを見出して感動してゐるのである。」と説かれ、正に従ふべき解釈である。しかるにまた「をかし」の語註で、「をかしは、犬の行動を知性に照して批判してゐる。何か古物語や古伝説などに見られさうな面白さを、この犬の行動に見出して、面白く感じてゐるのである。」と説かれ、これは(4)の異談珍説の立場である。清少が一方で、「温い同情心によって犬のくづをれる激情」に陶酔しながら、他方で古伝説的面白さに興ずるといふ二重人格的心理からこの作品を草したと思へない。私の解釈では、「をかし」はこゝでは弱小な者の表はす可憐美を指すと解するのである。末尾の「なほあはれがられてふるひなき出でたりほどこそ云々」の条に示された同博士の解釈をも参照し、私の考へ方と同じでないと判断したのである。（本誌8頁参照）

○金子元臣翁の枕草子評釈は懇切詳細を極め、ことにこの事件と皇后の身上とを連関させた点で敬服される。しかし把握の中心に何か的外れなものを感ずる。それは清少の心のとり方がわれわれとは異るからである。

清少の才筆によって、千古の名犬となりおふせ、人口に膾炙されるやうになった。（枕草子評釈六二頁）

か程まで犬に同情したのは、清少の性格として、佞媚な猫などよりは、快活な犬の方を好んだ故もあらう。（同右）

金子翁の説、猫より犬を好んだ（前註）等といふ事は私には考へられない。清少にとっては猫でも犬でもよいのだ、名犬伝を書かうとしたのでもない。彼女は翁丸を普通の犬にすぎないと思ってゐたであらう。それが眼前に居るとも気づかなかった人間から発せられた同情の言葉によって、一個の畜生が涙を流し鳴いたといふ事において、彼女は自己の全心ををのゝかせた。（「何とすばらしいことだ、らう！」と）

清少は薄命者の美しさとか、小さな思ひやりの嬉しさとかいふやうな心的体験を始終経験してをり、かういう問題に沈潜してゐた女性であらう。それがたま〳〵翁丸の行動によって触発され、この文章に形象したのである。この点が文学作品としての枕草子の、この段で肝要な所であらうと思ふ。清少のさやうな精神を証明するものとしては次の段がある。

萬の事よりも情ある事は男は更也、女もこそめでたく覚ゆれ。なげの詞なれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしき事を「い

とほし」とも、あはれなるをば「げに如何に思ふらん」などいひけるを、伝へて聞たるは、さし向ひていふよりも嬉し。いかで此人に思ひ知りけりとも見えにしがなと、常にこそ覚ゆれ。必思ふべき人訪ふべき人は、さるべき事なればとりわかれしもせず。さもあるまじき人のさしいらへをも、心易くしたるは嬉しきわざ也。いと易き事なれど、更にえあらぬ事ぞかし。

大かた心よき人のまことにかどなからぬは、男も女もありがたき事なめり。又さる人も多かるべし。（春曙抄、岩波文庫版二三六段）

右の段を私の様に翁丸に結びつけて説いた人は未だ無いが、私はこの両段こそ具体的事例と抽象的説明との関係に立つもので、その精神的基調は全く同一のものであると考へる。

田中重太郎氏は、「思ふに清女は猫よりも、犬をその性格的には愛したであらう。そして、この一段に見える翁丸に対する彼女のこまやかな心は彼女の女性としてのやさしさを十分教へてくれる。あの「よろづの事よりも人は情あること」といったこの冊子の作者の本音を。」―枕草子評解七六頁―と述べられたが、この説明では翁丸の条との直接的関係を指されたとは見られない。

「万の事よりも情ある事は」の段では「伝へて聞きたるはさし向ひていふよりも嬉し」とあるに反し、翁丸では清少が犬にさし向つて詞をかけた様に見えて矛盾の様であるが、実はさし向ってゐたのは翁丸ならぬ他の犬であると清少は思ってゐたのであり、翁丸も「死にけむこそ悲しけれ。何の身にか此のたびはなりぬらむ。いかにわびしき心地しけむ」と言った清少の詞を、自分に直接向けられたものとして聞いたのでなくて、清少の独語を傍聴したといふ関係にあるのであって少しも齟齬しない。

清少が腫れ汚げなる犬を翁丸だと知りながら、わざと知らない顔をしてゐたといふ解には従ひ難い。全く翁丸ではないとその時は思ってゐたのである。但し右近内侍の心事だけは不明としておく。

「万の事よりも」の末尾の「大かた心よき人のまことにかどなからぬは、男も女もありがたき事なめり。又さる人も多かるべし」は異解の多いところであり、翁丸に関係のない文意のやうであるが、私解によれば、「真実心と才能の両方を併せた人間は少い。真実心があるかと思ふとどこか愚直なところがあって生存競争におくれがちである。（大進生昌を見よ、そして翁丸を見よ）また此世で栄達してゆく人はとかく明哲保身、我利々々の冷血漢である。（滔々たる宮廷社会の男女を見よ）あゝ真実心と才能の両方を併せた人はゐないものだらうか。この宮廷社会には見当らぬ様である。しかしそんな美しい人間のゐる社会もどこかにはあるのであらう」と解せられて、やはり無関係の事でない。

二、かゝる心

諸先学が翁丸の段をかやうに理解したか否かは語句の註解だけの著述では分らない場合が多い。しかし語句の註解を通して、その理解の深さをうかゞへる場合がある。次に一つの問題を提出しよう。

○一条天皇のお詞に「あさましう、犬などもかゝる心あるものなりけり」とお笑ひになるところがある。かゝる心とはどんな心をお指しになったか。

右に対する諸説を分類すると次の通りになる。

(1) 初めはおそれ、今はかなしむ心を指すとするもの

春曙抄（季吟）・集註（関根正直）・評釈（池田亀鑑、春曙抄をひき、その後で、文意「おどろいたね、犬などもこんな人間のやうな気持があるものだったねとお笑ひになる」と附加せられた）等。

(2)勅勘を蒙った為かくれしのび深く畏りたる心、（またはそれに近似の心）を指すとするもの

通釈（武藤元信）・選釈（佐々政一稿、山内二郎補、かく勅勘を蒙ったが為に、我が種性を隠し世を恐れて憚るといふ考）・新釈（水井一孝）・全釈（栗原武一郎）等

(3)勅勘を憚る心を指すとするもの

評釈（金子元臣、驚くやうに、犬などでもこんな勅勘を憚る心は持ってゐるものであるよ）・精神と釈義（田中重太郎）・選釈（岸上慎二）等

(4)身の上をくらまさうとする心を指すとするもの

校註枕草子（吉沢義則）

(5)前述のやうな本段の理解から私の解答は次の様になる。

弱少なものの逆境に陥って依怙地になってゐた心が、他人の親切にふれて突然ほとび、嗚咽にむせぶといふ心を指す。

春曙抄の説は近いが中心をとらへてゐない。また勅勘を憚る心とか謹慎する心とかはあまりにも形式的皮層的である。天皇が直接かゝる心と言はれたのか、或はもっと具体的に「人の親切が分って、感激するやうな心」などと具体的に言はれたのを、清少がかゝると簡約したのか、それは何れとも分らないが、少くとも清少の解釈した天皇の心は右に述べた通りでなければならない。また歴史的事実としても、天皇の御心は、清少の解釈したのと同じであらうと思はれる。

次に、一千年前の犬の心が果して勅勘を憚ることなどでなくて、親切にくづされて泣き出す心であったと断じ得るか？と反問する余地があるかも知れない。栗原氏曰く

あまりの折鑑に翁丸は極度に人間を怖れた。すべての人間が自分に危害を加へるものと見えた事であらう。女房たちが呼んでも尾を振るわけに行かなかった。今やっと女房たちに害心のないのが分って来た。そこでひれふして甘えたものであらう。しかしかう底を割っては味も素気もない。やはり勅勘を憚ったものとしておかねばならぬ。（全釈「今ぞ立ちうどく」の解）

「勅勘を憚る」といふことに何かそぐはぬものを感じながら、あまり本当を云ふのは味も素気もないと云はれるが、「私は勅勘を憚る」と解する事こそ本段を味も素気もなくするものだと思ふ。季吟は勅勘などと考へてゐないが、武藤翁あたりから勅勘を憚るといふ考にとらはれ、多くの学者がこれを踏襲してゐる。栗原氏は動物心理学的に、その時の犬の心はどうであったかを云為されてゐるが、それはこゝでは第一の問題でない。肝要な事は動物の心を清少が如何に解釈したか、動物を通じて彼女の心情が如何に表現されてゐるかである。

「かゝる心」を私の様に解した人はいまだ管見に入らない。これは「翁丸」全章に対する諸学者の根本的把握が、如何にいゝかげんで的外れであるかを示す一証であると思はれる。

三、私解三題

文意の理解は個々の語句の意味を基にすること勿論であるが、同時に個々の語句の意味内容は全文意によって規制される。翁丸の段

全体の意味及び主題のあり方を前述の様に理解した本稿においては、「かゝる心」の場合の如く、語句の意味内容のとり方を他の研究家とは異にしなければならぬものが二三にとゞまらぬ。こゝではその最も著しい三ヶ条をあげて批判を受けよう。

第　一

○つひにこれをいひあらはしつることなど笑ふに（三巻本、朝日古典全書枕草子による）

○つひにいひあらはしつるなど笑はせ給ふに（春曙抄）

○これをついてにいひあらはしつるなど笑はせ給ふに（伝能因本、吉沢氏「校註枕草子」底本十二行古活字本による）

(A)この語句の発言者は誰か。

(1)天皇とする説（磐斎抄）

(2)皇后とする説（春曙抄以下）

(3)清少とする説（武藤、永井、栗原、池田、吉沢諸氏）

(4)女房とする説（田中氏）

「給ふ」のある伝能因本、春曙抄本に従へば、(1)か(2)になり、三巻本をとれば(3)か(4)にならねばならぬ。

(B)何を「いひあらはし」たか

(5)翁丸が可哀相だとの気持（田中氏、全書・精神と釈義・評解）

(6)この犬が翁丸であること（武藤氏以下）

(C)誰が「いひあらはし」たか

(7)清少か（諸説、大体これ以外にはない）

(8)翁丸自身か（これもなか〳〵面白い考へであるが、この説の人は無い）

(7)(8)の何れでも、私の以下の考へ方に矛盾しないが、まづ(7)の方をとっておく。

(D)「いひあらはし」た内容を誰が今まで匿してゐたか

(9)清少か

(10)女房か

(11)犬か

もし清少が匿してゐたとすれば、清少は腫れ汚げなる犬を翁丸だと知ってゐたことになり、それでは、「さはこれ翁丸にこそありけれ、よべは隠れ忍びてあるなりけりとあはれにてをかしきこと限なし。御鏡をもうちおきて『さは翁丸』と言ふに」の感動は全く作為の狂言になって、この段全体がぶちこはされてしまふ。こゝは昨夕の女房評定で、翁丸でないといふことになり、清少もだいたいさう思ってゐた。その犬がふるひわなゝいたので、「やはり翁丸だったのか！」と本心から感動するので意味がある。前から知ってゐたのではこの感動はおこらない。金子、栗原、池田、吉沢の諸先生がこの解をとられることは私の理解に苦しむ所である。かくしてゐたのは「犬」自身でなければならぬ。つまり顔にそっぽをむいてゐた態度を「かくしてゐた」と清少が解説したのである。

以上の諸要因を矛盾なく説いたものは現代の著書にはないのである。私解によれば、「あんなに名を呼ばれても犬が依怙地に知らぬ顔をしてゐたのに（11）、親切心を以て清少納言が（7）、翁丸だといふことを（6）、いひあらあしてしまったのね、まあすばらしいぢゃないのと皇后さまは（2）、うれしさうにおっしゃった。（2の6の7の11）

皇后か天皇かは決定的には決められないが、清少との間柄から考

へ、彼女の真心をよく知ってをられる皇后とする方がよりよいであらう。

この文の先行句に異文あり、「つひにこれを……(三巻本)、つひに……(春曙抄)、これをついてに(十二行古活字本)」は伝能因本をとれば吉沢博士の「これをきっかけに」に従ひたい。即ち「顔がはれた様だ」とか「何か手当をしてやらうか」などとガヤ〳〵清少や女房達の評定の初ったこれをきっかけに、初めて皇后さまが「いひあらはしつること!」と深い感動のお詞をもらされた。解詞が簡単なために後の学者は見のがしてしまったが、季吟はこの部分に関する限り私説と矛盾しない。

○中宮御詞、翁丸といひあらはしたると也(春曙抄)

盤斎抄でもまだそれほど見当ちがひではないがこの解に関する限り後世になるほど誤った方向へ進んでしまったと言はざるを得ない。

第　二

○なほあはれがられてふるひなき出でたりしこそよに知らずをかしくあはれなりしか(三巻本)

○なほあはれがられてふるひなき出でたりしほどこそよにしらずをかしくあはれなりしか(春曙抄)

○なほあはれがられてふるひ鳴きいでたりし程こそよそしらずをかしくあはれなりしか(十二行古活字本、よそはよにの誤字と考へる)

企意のとり方に二種ある。

(1)鏡を持って皇后に伺候してゐた清少の前で翁丸がふるひ泣き出した時の事を回想してゐるところとする説(佐々・永井・金子・田中・池田諸氏)

(2)鏡を持って伺候してゐる清少の前で翁丸がふるひ泣き出した事件とは別に、翁丸なことが全部の人々に分った後、またあはれがられて再び翁丸がふるひ泣き、御前を退出した事件があったとする説(春曙抄?・武藤・岸上?・池田諸氏)

〔註〕?印は明らかではないが、解詞から、(2)の説らしく思はれるもの

○池田博士は伝能因本に「ほど」の語あるにより、その日の出来事でなければならぬとして(1)の解釈をとられながら、「なほ」が「をかしくあはれなりしか」を修飾する点に無理があるとして別解(2)を立てられる。しかし(1)と(2)は矛盾する事実であるから二者その一を選ばねばならぬ。それに対して同博士は解決を与へられなかった。

一度清少の前で泣いた翁丸が、もいちど皆からあはれがられると再びふるひなき、勅勘もとけ、人々の感心する中を退出して行った。その事に清少がまたとなく感動したとするならば、何といふ気のぬけた茶番劇だらう。一度と二度の差にすぎないが、二度の方に感動する清少であったら枕草子は書けなかっただらう。清少も決して二度泣いたとは言はない。たゞ「いまぞたちうごく」と言っただけ。尻尾をふりクンクン言ひながら、あちこち動いたのであらう。之はどうしても(1)の方でなければならぬ。たゞ(1)とすると池田博士の云はれたように、なほが邪魔になる。このなほのため諸家は(2)の説を立てるに至ったのであらう。

これを解決しなければならない。

○なほの意味用法の吟味

なほはどの語を修飾するか

(1)「あはれがられて」を修飾するといふ説

磐斎抄（猶あはれがられとは初より一入あはれみをかうむる也。（傍点筆者）

武藤翁（翁丸が勅勘ゆるされて後猶人にあはれがられて、いかに感じけん。傍点筆者）

(2)「をかしくあはれなりしか」を修飾するといふ説

選釈（佐々政一稿・山内二郎補、猶、下のをかしくあはれなりしかへ続けて解釈するべきである）

永井氏（今想って見ても矢張り世に類なく面白く哀れであった。なほ、「をかしくあはれなりしか」にかゝる副詞）

金子氏（なほ。下の「をかしくあはれなりしか」に係る副詞）

栗原氏（なほ。下の「をかしくあはれなりしか」にかゝる）

池田氏、（なほを強ひて解釈するなら「をかしくあはれなりしか」を修飾するものと見なければならぬだらう。）

(3)「ふるひなき出でたりし」を修飾するといふ説

池田氏（評訳）

氏は(2)の解を試みながら、なほ落着きかねて、更に別解を示された。「なほ」といふ副詞は三巻本にも能因本にも共通するから原本のものであったと見なければならぬ。が、やゝ不自然であり強ひて解釈するなら「をかしくあはれなりしか」を修飾するものと見なければならぬだらう。しかしさういふ副詞の解釈には無理がありはせぬか。また「ふるひなきいでたりし」の「いで」にも解釈上の無理があると思ふ。「泣きいづ」といふ成語を認めるとしてもやはり心ゆかぬものがのこる。これは前にのべたこととは別の事実をのべてゐるものと見るべきではないか。即ち勅勘がとけたので、人々からふびんがられて、前と同じ様に身ぶるひをし、なきながら御前を退下して出て行ったその犬の後ろすがたをあらためて「をかしくあはれ」なるものと見たといふのではないか。（傍点筆者）

池田博士は犬がふるひなくといふ事実が二度あり、なほはその二度目なることを示す副詞と解せられて、前と同じ様にと訳され、「ふるひなきいで」を修飾すると考へられたのであらう。ふるひなきが二度あったとすることに対しては前に反対した通りである。「なきいで」のいでを退出と解するよりはもっと自然な「泣き初めた」と解することの妥当なことについては次の私説において述べるであらう。

(4)以上の(1)(2)(3)の何れに属するか不明の説

岸上氏（まだ（一人々に）可哀さうがられて……）。内海氏（なほ「後になってもなほ」）。田中氏（それにしても（私に）同情の言葉をかけられて、身をふるはせて啼き出した時こそ、…）

田中氏の説かれる「それにしても」は軽い接続を示す様な使ひ方だと解し得るが、この場合現代語にならあてはまるであらう。しかし当時の文章としてはにはかに従ふわけにゆかない。

(5)筆者は本段の趣旨に則して次の様に考へる。

他人から同情の詞をかけられると、あんなに依怙地にそっぽをむいてゐた犬でもやはり身をふるはして泣き出した。その時こそ（あんなに頑なになってゐてもやはり情にはほだされることがあると見えて）まことに可憐でもあり可哀相でもあった。即ちなほは「ふるひなきいでたりし」にかゝり、(2)の中へはいるが、池田博士とは全くその意味を異にするわけである。

私の解するなほの意味及び用法は、当時のものとしては最もありふれたものである。大言海なほ（直ノ義、其事ヲ曲ゲズシテ、本ノマヽナル意）（一）ソレデモ。ヤハリ

「あはれがられて、なほふるひなきいでたりしほどこそ、世にしらずをかしくあはれなりしか」とあるべきものだが、なほに強調があるため、文初に出たまでである。

「泣きいでたりし」のいでに池田氏は困られて「退下」とされたが、犬が泣くまいとじっとこらへにこらへてゐたが、清少の一言で我慢できなくなって、たうとう泣き出したのであるから、「泣きいで」が生きてくる。「なきいで」でなくてはならない。「なきしほどこそ」では力が抜けてしまふ。

第　三

○人々にも言はれて泣きなどす（十二行古活字本）

○人々にもいはれてなきなどす（春曙抄）

○人などこそ人にいはれてなきなどはすれ（三巻本）

(1)異談珍説の見地からこの語句を解したもの

磐斎抄（人々にもとは、逸物なればこそ人々にもいひはやされてあれと地の詞也。又云、けだものなれどもすぐれたる心ある故に後迄も人々にいひ出しあはれしうおもはれんと也、おろかなる人にあたりたる下の心あるべし。）

旁註（岡西惟中。人々モカハユヤ〳〵ト云也。是マデ犬猫などの上ニ聞みゝことなるものなり）

全く頓珍漢な解釈といふべきである。

(2)清少が犬に同情した時このとを、後になって人々から話の種に言ひ出され、また思ひ出して清少が泣くと解したもの

季吟・金子氏・吉沢博士（その当時のことを清少自身と云ひいで、また人々にいひ出されて泣いたりする）

しかし、この説の曖昧さについては江戸時代に既に疑問が出されてゐる。すなわち、

枕草子存疑（岡本保孝、犬ノ心ニ人々ニアハレカラルヽウハサヲイハレテ犬の意ニモ感シテナキナトスルヘシ。季吟ノ説イカヽ）（傍点筆者）

全体の意味としては正しく、その点で次の(3)に入れてもよいが、たゞ保孝の解は「人々にもいはれてなきなどす」の語句の正しい知解の上に立っての解釈でなく（彼は、「人々にいはれて」＝犬ノ心ニ人々ニアハレカラルヽウハサヲイハレテ。「なきなどす」＝犬ノ意ニモ感シテナキナトスルヨ。と解してゐる。かくこの語句においては「なきなどす」る主体は直接には「人」でなくてはならぬ。つまり保孝は語句の倫理的な解釈の自覚からでなく、云はゞあて推量で「犬が泣く」としてゐるにすぎないのである。意味構成が誤であるから(3)には入れられない。彼自身もそれを感じてか「……ナルヘシ」と自信のない言ひ方をしてゐる）事件全体の見通しから、かうであらうと推定したのであり、たまたまその推定が当ったまでである。

(3)この語句の解は関根博士に至って正解に達した。そのためには千蔭の対校した古本（多分三巻本であらう。千蔭の対校本については筆者未見）を参考せられることが必要であったわけである。

集註（関根正直）。春曙本には「人々にもいはれてなきなどす」とありて、註に哀なりし事を人にいはれて、清少のなく由に解かれたる、本文と共に註も誤れり。余が所蔵の慶安二年版行の素本には、「人々にいはれてなきなどはすれ」とあり。之を千蔭

は古本に校へて、上の方を「人などこそ人にいはれて云々」と訂したり。（末は古本も素本も同じことなり）かくありてこそよく聞えたれ。その意は人間こそ他人に憐みいはれて、泣きなどはすれ。畜類はいかでさる事あらんと思ひたるに、実にも、主上の宣給へる如く犬だにかゝる心あるものなりけり、との意を含めたるなり。

私の解く本段の趣旨から言へば、どうしてもこの説の通りでなければならない。

【註】島津博士も自分の愛犬の経験からこの解に達せられ、泣くのは清少でなく、犬のことでなければならぬ。その方がずっと面白いと思ふと述べられた。（鎌倉つれづれ草二三一頁）

明治四十年九月に出た武藤元信翁の通釈には「他よりさる事をいはれては、人ならば、往事を思ひ出して泣きなどすべけれど、犬はさる事もあるまじく思ひしに、今は犬もしかりと也」傍点筆者—とあって、(3)の説に似てゐるやうであるが、傍点の部分が誤であり、これは(2)と(3)の混合説の如きものである。従って関根博士を正解第一人者とするわけである。

関根博士は三巻本の本文を是なりとして採用され、正しい意味を開陳された。私も全く同感であり、現代諸家もそれに従ふ人が多いわけである。しかし古活字本や春曙抄の本文の如き伝能因本系の本文を関根博士のやうに、誤として簡単に捨て去れるであらうか。

関根博士は、○人などこそ人にいはれてなきなどはすれ（三巻本）V○人々にいはれてなきなどはすれ（慶安二年素本、私の調査によれば「人々にも……」となってゐた）V○人々にもいはれてなきなどす（十二行古活字本、春曙抄本）と考へられるやうである。但しAVBはBよりもAが正しき形の意味。すれの方がすよりも条件句としては適当であり、その点から慶安二年素本の方が古活字本よりも原形に近いと考へられた。

世の研究家に二傾向ある。三巻本は伝能因本に比してよく分るところが多い。この合理的なところを以て三巻本を原本に近いとする人と、わからない点の多いこと不合理の点の多いことで伝能因本が原本の姿を残すこと多しとする人とである。金子、池田、吉沢、坂元三郎（枕草子の疑義少々）の諸氏は後者である。

○この部分だけは（人々にもいはれての所）三巻本の方が通じやすいが、それだけに追記の疑ひが生じないでもない（池田博士）

○人々にも言はれて泣きなどす……「その当時のことを清少自身と云ひいで、また人々にいひ出されて泣いたりする」と釈くべきものであらう。（吉沢博士）

吉沢博士が校註枕草子の底本に、春曙抄、通釈等をとらず、註釈上難点の多い十二行古活字本をとられた趣旨を、註釈上難点の多いといふことは人手が加はってゐない為と見てよい場合が多いやうである（校註枕草子、校訂について）と述べられてゐるが、私も伝能因本にひかれることが多い。こゝでも伝能因本の「人々にもいはれてなきなどす」をむげに捨てられないから、この形を吟味してみる。すると次の二つの考へ方が生ずる。

(1)「人々にもいはれてなきなどす」（伝能因本）の形が原本の姿であるが、それでは人に十分理解できないので、「人などこそ人に云はれて云々」（三巻本）の形が、原著者又は後人の手によって出来た。

「不合理な語句」→「合理的な語句」といふことは考へられることで

ある。

(2)三巻本の形が原本の姿であって、それから伝能因本の形が生じた。

「合理的な形」→「不合理な形」といふ変化の必然性は一寸考へられない。廃語とか難語のある時は誤写もあり得るが、この文章は何れも平易な語ばかりである。それをわざ〳〵不合理な文章に改写してゆくといふことは特別な理由のない限り、考へにくいことである。

さすれば(1)の方を起り得べき変化と考へなければならぬ。伝能因本の形「人々にも云々」を何とか生かさうとする吉沢、池田、金子諸氏の試みの生ずる所以である。たゞ私にはその生かす方法としての解釈が賛成できないわけである。

私は最後に別の解釈を示すことにする。

○人々にもいはれてなきなどす（伝能因本）これはこのまゝ原本の姿であるが、たゞ読方がちがふ。即ち「ひとびと……」でなくて「ひと、ひとにもいはれて……」と読むべきである。さすれば意味は全く三巻本の本文と同じことになるのである。たゞ「人人にも」又は「人々にも」と書かれた字面を、原著者以外では「人、人にもいはれて……」と読み得る人が少かったと思はれ、誤読は原著者の同時代人の間にも既に生じたと思はれる。三巻本の本文はかゝる誤読を懸念した原著者又は有識者によって「人などこそ、人にいはれて……」と訂正されたものである。私はかやうに推測する。

四、枕草子の精神内容と表現形式

次表上段は池田博士が枕草子の内容と前田家本の巻の立て方とにより各条を分類されたものである。（岩波文庫版春曙抄解説二〇頁参照）下段はそれに対応した私の分類である。

枕草子内容分類

（池田博士）

第一類　天然自然の現象又は客観物に関するもの

日は。雲は。降るものは。
法師は。女は。
物語は。畳は。

第二類　主観的な精神内容に関するもの

めでたきもの。
あはれなるもの。

第三類　四季の情趣に関するもの

正月一日は。（下段Aへ入れる）
五六月の夕つかた。（下段Cへ入れる）

第四類　自然又は人生の感想に関するもの

男はめおやなくなりて。（註）
若くてよき男の。

第五類　日記紀行等に関するもの

淑景舎東宮にまゐり給ふ。

（筆者）

A：日は。雲は。降るものは。法師は。女は。物語は。畳は。正月一日は。（第三類より）春は。（第三類より）

B：めでたきもの。あはれなるもの。

C：五六月の夕つかた。（第三類より）七月ばかりに風いたう吹きて。（第三類より）若くてよき男の。

D：淑景舎東宮にまゐり給ふ。うへにさぶらふ御猫は。

（註）「男はめおやなくなりて」の段は私見よって除外する。之については別の機会にのべる。

池田博士の分類の第三類に属するものを二つに分け、「正月一日は」、「春は」、などは天然自然の現象又は客観物に関するものとして第一類に入れてA類とし、「五六月の夕つかた」「七月ばかりに風いたう吹きて」などを自然又は人生の感想に関するものとして第四類に入れてC類とすれば、第三類は解消して全体をABCDの四類に分けることが出来る。

（註）前田家本の分類を原著者のものでなく後人のものと見る。従って筆者の如きABCD四類別も許されるであらう。

また枕草子の多くの文章の冒頭にかゝげられた「日は」「物語は」「めでたきもの」「あはれなるもの」などの題になる詞を題詞と呼ぶならば（これを枕詞、枕などと呼ぶ人もあるが、枕草子における「枕」に就ては学説が一定しないから、しばらく之を避けることにする）次のことが言へる。

A　題詞あり。題詞の末尾「は」
B　題詞あり。題詞の末尾「もの」
C　題詞なし。
D　題詞なし。

いまB類を吟味してみるに、

うつくしきもの（題詞）
尼にそぎたる児の、目に髪のおほひたるを、
かきはやらで、うち傾きて物など見る、
いとうつくし。（心情詞）（春曙抄岩波文庫版一三六段）

（説明詞）

（以下文例番号は春曙抄岩波文庫版による）

「うつくしきもの」は題詞であり、後の「いとうつくし」は素材となった事物現象に対する著者の感想心情を表示したものであるから、かりに心情詞と呼ぶことにする。B類の題詞はこの心情詞に「もの」をつけるにすぎない。B類の文章には心情詞が文中、文末に存する場合が多い。

C類は題詞はないが、心情詞は殆どすべての場合に見られる。例へば

○五六月の夕かた、青き草を細うゝはしく切りて、赤衣着たるこちごの、小さき笠をきて、左右にいと多く持ち行くこそ、すずろにをかしけれ。（二二六）

「をかしけれ」は右にのべた心情詞であるが、この文には題詞がない。しかし、心情詞から題詞「をかしきもの」を作ることは容易であり、もし之を文頭に置けば、これ即ち、B類に転ずることになる。要するにB類とC類は根本的に観て同性質の文章である。

次にD類の文章は題詞もなく、心情詞も容易に見当らず、その点C類とは異なるのであり、諸家によって宮廷雑記とか身辺日記とか云はれる所以である。「翁丸」がこの類に属すること、また諸家の一致して説くところである。しかし私は之を単なる雑記と見ず、「弱きものゝ頑なさが温き心によってほとびる時の悲喜の感情」を主題にした作品と観、清少の心情的把握によって統一されてゐる文学作品と観ることは前述した通りである。即ち清少の主情をかし、あはれ、又はあさましによって貫かれてゐる。これらの語が即ちこの段の心情詞である。さう知ってこの段を読むと

○此のね（ゐナラン）たる犬、ふるひわなゝきて、涙をただ落しに落す。いとあさまし。さはこれ、翁丸にこそありけれ。よべは隠

れ忍びてあるなりけりと、あはれにて、をかしきこと限なし。…

○なほあはれがられて、ふるひ啼き出でたりし程こそ、世に知らず、をかしくあはれなりしか。

あはれ、をかし、あさまし（註）などの詞が作者の感情を表はすものとして目につく。

（註）「あさまし」善悪何れの方にも、あきれる位、ぞっとするほど、甚しきことを言ひ、枕草子「あさましきもの」の条では悪い方の甚しきことに用ひられてゐるが、こゝの「あさまし」はよい方に用ひられた場合である。源氏桐壺「かゝる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ」枕草子、めでたきもの「蔵人になりぬれば、之もいはずぞあさましくめでたきや」の類である。

この心情詞から題詞「あさましきもの」又は「をかしきもの」「あはれなるもの」を作れば容易にB類にも転ぜしめ得るのである。

春曙抄二一「すさまじきもの」（B類）の構造を吟味するに

すさまじきもの　……題　詞

昼ほゆる犬

春の網代

三四月の紅梅のきぬ

□

□

……素材詞

除目につかさ得ぬ人の家

今年は必ずと聞きてはやう

ありし者どもの、ほか〳〵なりつる

云々

……説明詞

いみじういとほしう、すさまじげなり……心情詞

即ちこの文章の根本的構造は題詞、素材詞、説明詞、心情詞から成立ち、素材詞、説明詞、心情詞の三つが説明の部を構成してゐる。清少はいくつかの素材詞を天来の金玉のやうに羅列するかと思ふと、突然、特定の素材について縷々と説明を試みることがある。この説明に盛られた内容は彼女が体験した事件である。「除目に司得ぬ人の家」の様子は父元輔の身の上そのまゝであらう。もしこの題詞及び素材詞がなく、説明詞だけが孤立したとすれば、それはとりもなほさずD類の文章になるわけである。反対に「翁丸」の条に題詞及び素材詞がついて次の様にでもなれば、即ちB類に列せられるわけである。

あさましきもの（「をかしきもの」、「あはれなるもの」でもよい）……題　詞

ひとの情に感ずる犬　……素材詞

うへにさぶらふ御猫は、かうぶり

賜はりて云々　……説明詞

いとをかしく、あはれなり　……心情詞

D類の諸作品を鑑賞するに当っては、その文章の底を流れる清少の主情をとらへ、この主情によってその文意を統一把握することの必要なる理由が分明になったであらう。この主情を把握しなければ、所謂平板無味なる雑記となり終り、単に史的資料としての価値しか発見出来ぬことになる。

最後にA類について吟味しなければならぬ。これはBCDの三類と異ってゐる様に見えるが、根本的の構造は異ってゐないのである。

○淵は。　……題　詞
かしこ淵。　……素材詞
いかなる底の心を見えて
さる名をつきけむと。　……説明詞
いとをかし。　……心情詞

すなわち題詞、説明の二部より成り、説明が素材詞、説明詞、心情詞の三部分に分たれる。これB類と根本的には構造が一致するわけである。A類は題詞を缺くことはないが、たゞ素材詞、説明詞、心情詞が、ある場合にはその一を缺き、ある場合にはその二を缺くために、この類は六種に細分類せられるのである。（分類表参照）

(1) は説明詞、心情詞を缺いたもの。（(1)(2)…は分類表の種類を示す。以下同じ）

○海は。水うみ。（十六）

○山は。小倉山。三笠山。このくれ山。わすれ山。（十一）

「海は」、「山は」が題詞であり、その下に続く説明の部としては、たゞ素材詞の羅列があるばかり。これが枕草子に非常に多い。興味あることには、かやうな素材詞をおしわけて、説明詞や心情詞が湧出ることがある。

(2) 説明詞の添うたもの

○春は（題詞）曙（素材詞）やう〳〵白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる（説明詞）—一—

(3) 心情詞のみ添うたもの

○草は（題詞）葵（素材詞）いとをかし（心情詞）　—五五—

(4) 素材詞、説明詞、心情詞を備へたもの

○山は（題詞）かたさり山こそ（素材詞）
難に所をきけるにかと。（説明詞）をかしけれ（心情詞）—十一—

(5) 素材詞、心情詞を缺いたもの

○五月五日は（題詞）雲りくらしたる（説明詞）　—八—

(6) 素材詞を缺いたもの

○修法は（題詞）仏眼真言などよみたてまつりたる（説明詞）なまめかしうたふとし（心情詞）　—一〇二—

もしD類の「翁丸」をA類の形式で表現するなら次のやうになる。

○犬は（題詞）翁丸（素材詞）ひとの情を知りてふるひ啼き出でたりしこそ（説明詞）をかしくあはれなれ（心情詞）

これはA類とD類が一見すれば全く異質の文章に見えながら、実は作者清少の心の奥において一定してゐる心情作用によって基礎づけられ、また文章の構造においてもA、D両類の間には共通した構造が存するからである。

A類においても肝要な事は、題詞や素材詞が、心情には関係のない「山」や「橋」の如き非情物の羅列でありながら、その背後にあって清少の主情がこれを統一してゐることである。単に辞書的語彙的に物名を蒐集したものでないことである。たとへ心情詞が現はれてゐなくても、心情作用が底流し、それによって物名に血が通ってくるのである。物名が実在、仮托、空想の何れでもよい、いな一見、無秩序に不羈奔放にならべられるほど、彼女の心情の躍るのが感ぜられる。（例文の下の漢数字は岩波文庫版の段を示す）

×　×　×

A類とB類の相異点は題詞にあるが、これも根本的には相似た性格を有し相互転換し得るものなることを述べよう。

A類の題詞

山は。峯は。春は。遊びは。修法は。主殿司こそ。

この構造は［名詞＋は（又ハこそ）］である。名詞のうち最も多いものは、山、峯などの具体名詞であり。それ以外の作用名詞、抽象名詞（遊び、修法など）も少数である。これらの名詞は作者の思考の対象になるものを示す名詞であるから対象詞と呼ぶことにする。

A類題詞……［対象詞＋は（又ハこそ）］

B類の題詞

すさまじきもの。にくきもの。こととなるもの。こゝろゆくもの。たゆまるゝもの。

この構造は形容詞、形容動詞、又はその他の活用連語であって、主体の心情を示す詞――これを私が心情詞と呼ぶことは前述の通り――にものの附加されたものである。

B類題詞……［心情詞＋もの］

対象詞は主体（清少）の思考対象をあらはす詞であり、心情詞は主体（清少）の心情をあらはす詞である。然るに現に主体に或る心情（うつくし、にくしき等）を起させつゝある物は、とりもなほさず主体がその思考作用を及ぼしつゝある物、対象である。

例へば、主体に「すさまじ」といふ心情を起させてゐる物―春の網代―は、主体が現に思考しつゝある物―思考対象―に外ならぬ。

すさまじ＝心情詞

春の網代＝すさまじき＋物＝対象詞

この関係から次の事が云へる。

心情詞＋もの＝対象詞

然るに、心情詞＋もの＝B類の題詞　である。故に

［B類の題詞＋は（又ハこそ）＝A類の題詞］

簡単に言へば、B類の題詞に「は」（又ハこそ）をつければ、A類の題詞となるのである。

A類とB類が構造上、また思考作用上、近しい関係にあることは之によって明瞭であらう。私は論理をたゞ弄んでゐるわけではない。次にその実例を示す。

○世の中に猶いと心憂き物は（春曙抄本二三四。三巻本も同じ）

○かしこきものは（三巻本一八二）

○悪き物は（春曙抄本二四八）

○かうやあらむと見ゆるものは（三巻本二三二。春曙抄本二二一、見ゆるものトアリ）（春曙抄本一八五、三巻本も同じ）

○見る物は

（見ゆる見るなどは心情詞と言へないが、主体の作用を表すもの、作用詞であるから、心情詞に準ずるものとして考へてよいであらう。この他「降るものは」（二〇七）の例があるが、降るは対象の属性であるから「降る物は」はA類本来のものである。この例ではない）

右の例は元来B類的な題詞であるものが、少し形式を変ずることによって容易にA類に転じたのである。「見ゆるものは」（三巻本）の如きは春曙抄本「見ゆるもの」とあって未だB類形式を保ってゐる。同一文章において、伝本によりA類・B類の両方に題詞形式の分れてゐることは、この両題の相互転換性を物語るものと云へよう。

要するにA・B・C・Dの四類が外形頗る相異してゐるにもかゝはらず、一歩反省すれば極めて類似の性格及び構造を有し、容易に相互転換し得ることを指摘したのである。次にその分類表を示すであらう。

枕草子形式分類表

類＼種	題詞 対象心情 詞a	題詞 対象心情 詞b	説明 素材説明心情 詞c	説明 素材説明心情 詞d	説明 素材説明心情 詞e	心情作用	備考
A 1	○	／	○	／	／	○	○は該当項目ノ存在、／ハ非存在ヲ示ス。例ヘバA類第四種ノ文章ニ於テハ題詞ハ対象詞ガ使用サレ（心象詞ヲ題詞ニ用ヰズ）、説明ノ部分デハ素材詞アレド説明詞ナシ、心情詞アリ、（例文、草はa、葵c、いとをかしe—五五—）
A 2	○	／	○	○	／	○	
A 3	○	／	○	○	／	○	
A 4	○	／	○	／	○	○	
A 5	○	／	／	○	／	○	
A 6	○	／	／	○	○	○	
B 7	／	○	○	○	○	○	
B 8	／	○	○	○	／	○	
B 9	／	○	○	／	／	○	
B 10	／	○	／	○	／	○	
B 11	／	○	／	○	○	○	
C 12	／	／	／	○	○	○	
C 13	／	／	／	○	／	○	
D 14	／	／	／	○	○	○	
D 15	／	／	／	○	／	○	

心心象詞ハ作者ノ存否ヲ判断スルハ鑑賞者ノ主観ニヨル、私ノ主観ニヨッテ存在スルト判断シテ○ヲ附シタ。

（この表は大部分の文例から帰納した類別であるが、未だ全部のものに及ばない。従て仮定の域を出ない。全部に亙って検討すれば、なほ四類十五種の何れにも属せず、中間的な存在を発見するかもしれない。また枕草子の文章は事実の解釈は出来ても、私の様に作者の底流する主情をとらへることを旨とする者にとっては、如何にとらへるべきかに迷はねばならぬ場合が多く、未だ疑問のものも相当存する。しかし比較的分明な類型といふ意味でいちおう四類十五種を掲げたのである。）

例

1、海は。水うみ。（一六）（漢数字は岩波文庫版、春曙抄の段を示す。アラビア数字は分類表の種を示す）

2、淵は。ないりその淵。誰にいかなる人の教へしならむ。（一五）

3、淵は。かしこ淵。いかなる底の心を見えて、さる名をつきけむと、いとをかし。（一五）

4、草は。葵。いとをかし。（五五）

5、五月五日は。曇りくらしたる。（八）

6、修法は。仏眼真言などよみたてまつりたる。なまめかしうたふとし。（一〇三）

7、すさまじきもの。除目に司得ぬ人の家。今年は必ずと聞きて……（中略）……。すさまじげなり。（二一）

8、騒がしきもの。暗う成てまだ火もともさぬ程に、ほか〳〵より人の来集りたる。（二一二）

9、すさまじきもの。昼はゆる大。（二一）

10、たゆまるゝもの。寺に久しく籠りたる。（二二）

11、すさまじきもの。家ゆすりて取りたる婿の来ずなりぬる。いとすさまじ。（二一）

〔三十九頁に続く〕